

『栄花物語』の為平親王子日遊記事について

塚崎 夏子

はじめに

『栄花物語』月の宴巻においてひとときわ印象的に語られるのが、村上帝の愛息であった四の宮為平親王の幼き日の子日遊の回想である。村上帝崩御後、為平方の期待を裏切って同母弟の五の宮守平親王が立坊した。さらに、大納言藤原伊尹女の懷子が第一皇子を出産したことで、為平立坊の希望はいよいよ薄れていき、為平の舅源高明は心外な情勢を嘆く。一方で冷泉帝の病状は一向に改善せず、讓位が近いのではと人々が囁くうちに、高明が為平排斥の怨みから謀叛を企てているという噂が流れ——と、安和の変勃発に向かって物語は進行する。その中途、高明の失意の叙述の直後に挿入されるのが為平親王の子日遊の回想である。

「帝と申すものは、やすげにて、またかたきことに見ゆる」という『栄花物語』独自の歴史観が述べられた後、世人の語り草として、為平が父母の愛を一身に受けていた頃の、子日遊の華やかな様子が紹介される。この子日遊は応和四年（九六四）に実際に行われたもので、『栄花物語』『大鏡』をはじめとして古記録や私家集にも多数の記録が残っており、為平が生涯で関わった催しの中でも、突出して盛大な儀式であったことが推測される。

しかし、原則時系列順に歴史を語る『栄花物語』があえて年時を大きく違い、子日遊記事を安和の変の手前に配置していることは注目すべきである。本稿では、『栄花物語』の為平の子日遊記事の問題点と、その叙述の意図について分析したい。

一、『栄花物語』の為平親王子日遊記事の問題点

当該記事は、為平の昔の権勢を知る世人によって語られた、という体裁を取っている。

「式部卿宮の童におはしまししをりの御子の日の日、帝、后もろともにゐたせたまひて、出し立てたてまつらせたまひしほど、御馬をさへ召し出でて、御前にて御装ひ置かせなどして、鷹犬飼までの有様を御覧じられて、弘徽殿のはざまより出でさせたまひし。御供に左近中将重光朝臣、藏人頭右近中将延光朝臣、式部大輔保光朝臣、中宮権大夫兼通朝臣、兵部大輔兼家朝臣など、いと多くおはしきや。その君達、あるは後の御兄たち、同じき君達と聞ゆれど、延喜の御子中務宮の御子ぞかし。今はみな大人になりておはする殿ばらぞかし。をかしき御狩装束どもにて、さもをかしかりしかな。船岡にて乱れたはぶれたまひしこそ、いみじき見物なりしか。后宮の女房、車三つ四つに乗りこぼれて、大海の摺裳うち出したるに、船岡の松の緑も色濃く、行く末はるかにめでたかりしことぞや」と語りつづくるを聞くも、今はをかしうぞ。「四の宮帝がねと申し思ひしかど、いづらは。源氏の大臣の御婿にな

りたまひしに、事違ふと見えしものをや」など、世にある人、あいなきことをぞ、苦しげに言ひ思ふものなめる。

(①六五―六六頁)

日遊の当日、父帝村上と母后安子が、御前で為平の馬に馬具をつけさせ、鷹飼や犬飼も自ら点検するなど、熱心に世話を焼いて準備を整えた。為平は安子の居所である弘徽殿の西廂前通路から出立し、中務宮代明親王男の源重光・延光・保光、安子の兄弟の藤原兼通・兼家らなど、多くの貴公子たちが「をかしき御狩装束」に身を包んで付き従った。一行は船岡山にて「乱れたはぶれ」「いみじき見物」であつたという。安子の女房も三、四輦の車に乗り込んで同行し、「大海の摺裳」を車の簾から打ち出していた。子日の若菜摘みや小松引きが実施されたことは見えないが、「船岡の松の緑も色濃く」「行く末はるかにめでたかりし」と、子日の松や長寿の祈りを連想させる一節が末尾に置かれている。さらに「あいなきこと」としつつも、「帝がね」だと思われた為平は、高明の婿となったことで「事違ふと見えし」と「世にある人」が「苦しげに」評する様を述べ、話題は冷泉帝の容態へと移っていく。

まず「帝、后もろともにゐたせたまひて」と、両親である帝と中宮がこの催しにおいて心を合わせ、全面的に為

平の後援をしたことを述べる。当該場面に限らず、月の宴の為平は「后宫も帝も、四の宮をかぎりなきものに思ひきこえさせたまひければ」(①三六頁)、結婚をめぐつては「帝も宮も御気色さやうに思しければ」(①三七頁)「帝、后の御よめ扱ひのほど、いとをかしく」(①同頁)、また長じてからは「帝も后もふりがたきものに思しきこえさせたまふ」(①四〇頁)と、両親からの鍾愛と干渉を強調する叙述が目立つ。「御馬をさへ」「鷹犬飼まで」と、その世話の焼きぶりを規範から逸脱するものとして書いている。

鷹飼・犬飼に言及していることで、この催しが単なる野遊びでなく、狩猟を伴うものであったことが分かる。おそらくは船岡山周辺で鷹狩を行ったのであろう。付き人たちも狩衣に指貫の「御狩装束」で、通常の宮廷儀礼のように束帯を着ておらず、かなりの軽装である。『栄花物語』で、殿上人の狩衣姿での供奉は、女院詮子・彰子の寺院参詣や道長受戒など非公式の盛儀で見られ、さらに年若い名門の子弟の装束として書かれる傾向がある。⁽¹⁾当該記事で名前の挙がる代明家の三兄弟や兼通・兼家は、「今はみな大人になりておはする殿ばらぞかし」と当時軽輩であったことを仄めかされるが、それに連動した描写であろう。

船岡山で「乱れたはぶれ」たという表現が目を引きが、

これが具体的にどんな行為を指すのか分からない。当該箇所校異は少なく、管見では、富岡本が「ふなおかにてたかつかひてみたれ給へりし」、学習院本が「いまはみなおとなになりておはする殿はらおかしき御かりさうそくにてみたれたはふれ給ひし」と、二種類の異なる本文を認め得たばかりである。⁽³⁾前者のように、狩猟あるいは鷹狩の光景が「乱れ」と形容される例は、管見の限り他に見当たらなかった。一方、後者のように「狩衣」と「乱れ」が表現上結び付けられる例は複数あり、たとえば『古今和歌六帖』の貫之歌「狩ごろも心のうちに干さなくになどか乱れて物思ひをする」(三三〇八番)や、摺り染めの狩衣に因んだ『伊勢物語』初段の「春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず」(一一三頁)などが挙げられる。梅沢本の「船岡にて乱れたはぶれたまひし」に沿って読むなら、装束よりも船岡山での催しに由来する表現だと思われるが、人々が狩衣を着て鷹狩をする姿をこのように形容したのだろうか。いずれにせよ、負の意味を内包する表現ではないと考える。

比較のため、同じ歴史物語である『大鏡』の叙述も見ておきたい。語り手大宅世次は、為平について「冷泉院の御継ぎに、まづ東宮にもたちたまふべき」とその正当性を述

べ、舅の源高明一族の繁栄を妬んだ師輔男たちが「非道に」弟守平を立坊させたのだ、立坊の日は兼家が守平を密かに宮中へ連れ出した、などと陰謀の存在を生々しく語る。安和の変も「いとおそろしくかなしき御ことども」と同情的な口ぶりである。娘婉子女王入内では世人の誇りを受けたが、それも花山帝の出家により皇子を産めず終わってしまったことを述べて、そんな不運な為平でも「世にあはせたまへるかひある折一度おはしましたるは、……」と、一連の為平物語を締めくくる挿話として子日遊について語り始める。

御弟の皇子たちもまた幼くおはしまして、かの宮大人におはしますほどなれば、世おほえ、帝の御もてなしも、ことに思ひ申させたまふあまりに、その日こそは、御供の上達部・殿上人などの狩装束・馬鞍まで内裏のうちに召し入れて御覧するは、またなきこととこそはうけたまはれ。滝口をはなちて、布衣のもの、内にまゐることは、かしこき君の御時も、かかることはべりけるにや。おほかたいみじかりし日の見物ぞかし。物見車、大宮のぼりに所やははべりしとよ。さばかりのことこそ、この世にはえさぶらはね。……

〔右大臣師輔〕一五六頁

応和四年当時、十三歳で未元服の為平を「童におはしましし」とする『栄花物語』と異なり、「かの宮大人におはします」と語る『大鏡』の叙述態度に注目したい。弟たちが幼かったというが、為平の同母弟は守平一人、年の近い異母兄弟には一歳年上の致平や二歳年下の昭平がいたから、兄弟の中で特に為平だけが「大人」だったわけではない。為平皇位継承の正当性を年齢面から匂わせ、「世おほえ」「帝の御もてなし」を際立たせるためであろうか。

当日は、出立前に扈從の上達部・殿上人や馬を宮中に引き入れ、装束や鞍などを御覧になった。これだけでも「またなきこと」であったが、「布衣のもの」が参内したのは異例であったという。「布衣」は狩衣、中でも六位以下の下賤の者の料を言うことが多い。『栄花物語』で言及されていた鷹飼や犬飼らを「布衣のもの」と総称しているとみられる。このような階層・服装の人々が参入する例は全く無いわけではない。後代の文献になるが、『禁秘抄』は寛平御遺誠を根拠に、六位藏人・下臈女房より下の身分の者は原則、楽人・隨身以外内裏に召すべきではないとし、「村上御宇。為平親王子日時。布衣輩渡御前」の例や「延喜御時。京中上鞠者被_レ召仁寿殿東庭」の例を取り上げて「如_レ此例雖_レ多。不_レ可_レ有尋常事也」と難じている。

『雁衣鈔』は朱雀朝の『吏部王記』天慶六年二月二十九日の例を取り上げ、温明殿前に烏帽子・布衣を着用した「当世得_三其名_一輩数十余人」が集められたと述べる。『大鏡』の「かしこき君の御時も、かかることのはべりけるにや」という評は必ずしも当たらないことになるが、それだけに語り手世次のやや非難がましい口調が際立つことになる。

当該場面は過剰さを演出する表現が目立つ。前掲の箇所が続く本文も見てみよう。

殿ばらの、のたまひけるは、「大路わたることはつねなり。藤壺の上の御局に、つぶとえもいはぬ打出ども、わざとなくこぼれ出でて、後の宮、内の御前などさしならば、御簾のうちにおはしまして御覽ぜし御前通りしなむ、たふれぬべき心地せし」とこそのだまひけれ。またそれのみかは、大路にも宮の出車十ばかり引きつづけて立てられたりしは。一町かねてあたりに人もかけらず。

（『右大臣師輔』一五六―一五七頁）

過剰さを強調する傾向は『栄花物語』の書き方も同じだが、『大鏡』の場合は「ことに思ひ申させたまふあまりに」「またなきこと」「かかることのはべりけるにや」「さばかりのことこそ、この世にはえさぶらはね」「またそれのみかは」と、輪をかけて誇張した表現を散りばめている。特

に傍線部は、前例・類例のないことを繰り返しており、全体的に批判的な語り口である。『栄花物語』で「三つ四つに乗りこぼれて」とされていた安子方女房の出車についても、『大鏡』では「十ばかり」とし、船岡山ではなく都の大路にて「一町かねてあたりに人もかけらず」ぬ様子を語るところで、より過剰・過美を強調する。

また、供人・鷹犬の検分場所の叙述も『栄花物語』と『大鏡』では異なる。『栄花物語』は「御前」とだけしか書いていない。その後で為平を「弘徽殿のはざま」から出發させたと述べるから、弘徽殿で検分が行われたと捉えているか。一方『大鏡』では、扈從した「殿ばら」が「藤壺の上の御局」の御簾の中に並ぶ村上・安子の御前を通つたと述べており、場所が明らかに清涼殿である。為平関連記事で「帝」「后」を並記し、母後の存在感を仄めかす『栄花物語』に対して、『大鏡』は当該記事冒頭の「帝の御もてなし」と父帝単独で述べる点からみても、為平の待遇を村上帝の意向ありきとして扱う傾向があるように思われる。

さて本稿では、『栄花物語』の為平子日遊記事について、二つの疑問点から読み解きたい。

第一に、為平の過去の象徴として、なぜ子日遊が選ばれたのか。第三節で詳しく述べるが、為平弟の円融院も寛和

元年（九八五）に紫野で大規模な子日遊を催している。子日遊が単なる恒例の年中行事ではなく、王権にとって重要な意味を孕む可能性を考えてみたくなる。

第二に、供人のうち、父方の従兄弟に当たる代明親王の子息たちが特に言及されるのはなぜか。先述の通り、代明親王男たちは当時まだ軽輩であるし、『栄花物語』全体を通じて登場も少なく、そこまで重要人物とは思えない。ただし、『大鏡』と異なり為平排斥を陰謀と紐付けず、為平自身の瑕から出た問題として説明する『栄花物語』が唯一、当該記事の末尾で「源氏の大臣の御婚になりたまひしに、事違ふと見えしものをや」と、姻戚関係が影響を及ぼした可能性に触れている。高明と同じ源氏で「延喜の帝」の孫王である代明親王男の存在は、『栄花物語』の為平排斥の解釈を検討する上で、一考の余地があるのではないか。

次節では、為平親王子日遊に関する歴史的資料を儀礼研究の視点から分析し、この日行われた儀式の詳細を明らかにする。第三節では、宮廷儀礼としての子日の行事の変遷を辿り、屋外での狩猟を伴う子日宴の先蹤となる例が宇多天皇の寛平八年北野行幸以外にみられないこと、為平の子日遊はこの北野行幸の例を意識的になぞるように、村上帝と中宮安子によって演出されていたことを論じる。第四節

では、子日遊当日の供人として記載される「延喜の御子中務宮の御子」の叙述を手掛かりに、『栄花物語』の「源氏の大臣の御婚になりたまひしに、事違ふと見えしものをや」の一節を改めて検討し、新たな解釈の可能性を探る。

二、史実における為平子日遊の特徴

儀式の性質を考えるため、まず『日本紀略』応和四年（九六四）二月五日条を見てみよう。

今日第四為平親王自禁中一出北野。有子日之興。中納言師氏以下多以陪從。供鷹犬等。

為平の行き先は遊獵の地北野で、鷹犬も連れている。当日は母方の大叔父藤原師氏以下、多数の人々が付き従った。なお、『栄花物語』『大鏡』は共に師氏の存在には触れていない。

次は『西宮記』巻八「臨時行幸」裏書所引の『佐忠私記』を引く。

今日第四親王出城北野、有子日之遊、左衛門督、宰相中将并雲上有職、或依天氣、或有宮令旨、多追従通闕華麗云々。

左衛門督とは前出の大叔父師氏、宰相中将とは伯父の伊尹である。伊尹の同行も『栄花物語』では触れられない。

人々は村上の意向或いは中宮安子の命令で為平に同行したという。

『大鏡裏書』は「式部卿為平親王子日事」として『村上天皇御記』当日条逸文を引用する。

為平親王遊覧「北野子日之興」也。平旦天陰。及「午」尅「漸晴」。同刻召「為平親王。参議伊尹朝臣於前」。又召「覽陪從殿上侍臣鷹飼等被馬」(四位着「直衣」。五位着「狩衣」。鷹飼四人着「野装束」)。又召「從親王」小童三人。其騎馬等同覧。未刻許為平親王使「藏人所雜色藤原為信獻「鮮雉」一翼」。助信朝臣所「捕獲」云々。入夜為平親王。右衛門督藤原朝臣朝忠。伊尹朝臣等。還参「候侍所」。即於「侍所」給「酒」。侍臣等執「献物」列立。藤原朝臣問「之」。即重光朝臣称「親王献御贊」。各称「物名」。藤原朝臣仰令「給「御厨子所」。侍臣酣醉奏「絃歌」。良久賜「三卿等祿」。先「是親王退下。不「給」祿」。亥刻入内。

当日の午刻、村上は為平と藤原伊尹を召し、供をする殿上人・鷹飼や親王付き童の馬を自ら御覧になった。装束は、四位以上は直衣、五位官人は狩衣、鷹飼は野装束であった。出立後、未刻に北野の為平から使者があり、藏人所の雑色が狩の獲物「鮮雉」を天皇に献上した。為平一行は

夜に帰還して侍所に入り、酒宴が設けられた。獲物は為平から天皇に献上され、品目を確認して御厨子所に回された。酒宴の饗饌として調理されたのであろう。宴後は扈從した王卿に祿が与えられたが、為平はその前に御前を下がり、為平への賜祿はなかった。

鷹飼の同行に加え、村上に「鮮雉」「御贊」が献上されている点からみて、この「子日之興」の実態は北野での遊獵であった。村上自身は遊獵に同行していないが、為平の供人には本人の退出後に祿を与えており、この儀式の実際の主催者であることは明白である。天皇が催す行事であれば、それに奉仕した諸王卿は原則、為平を含め全員祿を賜るのが普通である。しかしこの日の為平は、天皇に奉仕するというより、官人たちを狩獵に奉仕させた側である。為平への賜祿がなかったことは、参加者の中での為平の特別な立ち位置を可視化している。

供人や狩獵の記録が主で子日に因んだ内容はみえないが、和歌資料はどうか。『元輔集』には「式部卿親王の子日の日人々にかはりてよみて侍る」と詞書があり、二首を載せる。

舟岡に若菜摘みつつ君がため子日の松の千世をおくらん

子日する松の千年の春ごとに若菜は摘まん野辺のまに
まに

『順集』は「四のみこの、北野に子日しにいで給へるに」
という詞書で次一首を収める。

いにしへのためしをさけばや千代まで命をのべの小松
なりけり

『道綱母集』は「四の宮の御子日に、とのにかはりたてま
つりて」の詞書で一首を載せる。

峰の松おのが齢の数よりもいま幾千代ぞ君にひかれて
元輔歌の文言からは、散文資料には一切記されなかった
若菜摘みの存在がうかがえる。さらに、四首とも子日の松
を詠み込んでいる。遊覧の中で小松引きが実際に行われた
のか、或いは『栄花物語』でも言及されていた「船岡の
松」を子日に寄せて詠んだものか。現実の行事内容に関係
なく、様式化された題材を詠んでいる可能性も捨てきれな
い。何れにせよ、各詞書からみて、参加者に和歌を詠進・
披露させる機会が当日の宴に組み込まれていたか。

それにしても、東宮を差し置いて一親王の外出を全面的
に後援し、官人にも公事さながらの奉仕を求めた、村上と
安子の過剰なまでの介入が目につく。彼らの思惑を探るた
め、次節では宮中での子日宴の歴史の変遷や村上朝前後の

実態、為平の子日遊の先蹤を分析する。

三、子日の行事の歴史の変遷と寛平八年北野行幸

本節では、為平子日遊に至るまでの、宮廷行事としての
子日の行事の変遷を、史料上に残る例によって検討してみ
たい。なお、子日の若菜摘みの風習により初子の日の催し
「供若菜」と正月七日の催し「献御粥」(七草粥)がしばし
ば混同され、中には区別が難しいものもあるが、本稿では
明らかに子日の催事と判断できる例のみ、分析の対象とし
て用いる。⁽⁶⁾

子日の行事の資料上での初見は、『万葉集』巻二十の大伴
家持作の四四九三番歌である。孝謙朝の天平宝字二年(七
五八)の初子の日に当たる正月三日丙子、「内裏の東の屋の
垣下」に侍従・堅子・王臣等を集め、玉帚を下賜して詩歌
を作らせる宴があった。「玉帚」は蚕室を掃く道具で、中
国では后妃親蚕の料として、帝王躬耕の料の唐鋤と共に初
子の日に飾られた。肆宴自体について、井上薫氏は、唐風
文化に傾倒した藤原仲麻呂が親耕親蚕の儀式を取り入れた
ものの、仲麻呂の求心力低下で消滅し、後世には受け継が
れなかったと論じる。⁽⁷⁾

天平宝字二年以前については、天平十五年(七四三)の

初子の日である正月十二日の「石原宮樓」への行幸と饗宴が『続日本紀』にみえる。この宴では勅により、参加者のうち琴を弾くことができた五位以上の官人には摺衣が、六位以下には祿が与えられた。倉林正次氏⁽⁸⁾をはじめ、諸先行研究ではこれを「子日宴」と見、元明・元正朝に既に子日の行事は成立していたと考えている。しかし、宴の内容自体は特に子日と関係がないため、開催日以外に「子日宴」であることを裏付ける根拠がない。大濱眞幸氏は『万葉集』中の宴席歌の中から初子の日に詠まれたものを調査しているが、何れも公宴ではなく私邸で催された宴であり、四四九三番歌以外に子日を意識した文言を含む歌は見られないと指摘している⁽⁹⁾。

宮中で子日に因んだ宴が再び催されたのは平城・嵯峨朝のことである。『類聚国史』巻七十二・歳時三には「子日曲宴」項があり、平城朝から文徳朝までの七例が挙げられている。

平城天皇大同三年

正月戊子（六）。曲宴。賜五位已上衣被^一。

庚子（十八）。曲宴。賜侍臣衣被^一。

嵯峨天皇弘仁四年

正月丙子（廿二）。曲宴後殿。令文人賦^{上レ}。

詩。賜祿有^レ差。

五年正月甲子（十六）。宴侍臣。賜綿有^レ差。

八年正月甲子（四）。曲宴後庭^一。

淳和天皇天長八年

正月壬子（十三）。天皇曲譙仁寿殿。參議以上預焉。賜祿有^レ差。

文徳天皇齊衡四年

正月乙丑（廿六）。禁中有曲宴。預之者不^レ過公卿近侍數十人。昔者上月之中。必有此事。時謂之子日態也。今日之宴修旧迹^一也。

北山円正氏は、平城朝の大同三年（八〇八）の「子日曲宴」二例を前年の正月七日と踏歌節会停廃に伴う代替とみており、この時の宴が弘仁・天長年間の子日曲宴の先蹤となったと推測している。齊衡四年（八五七）の記事は「子日態」を「昔者上月之中必有此事」と説明しており、一時期は恒例と言える頻度で行われたが、文徳朝の時点で既に過去の風習になっていたことが分かる。開催日も初子の日より二度目の子日が多い。齊衡四年の乙丑の開催例は子日ですらないが、北山氏が指摘する通り、子日宴になぞらえ

た内容だったのであろう。

これ以降、子日の行事と判断できる宮廷儀礼は宇多朝までみられない。『日本紀略』によれば寛平五年（八九三）正月十一日に「密宴」が催され、この折に『本朝文粹』巻九所収の菅原道真作「早春観_レ賜_レ宴宮人_一同賦_レ催_レ粧応_レ製」詩が作られた。道真は詩序の中で、「旧史」を分類する際「上月子日」に「菜羹之宴」を賜う例を見たと述べる。「旧史」分類とは先述の『類聚国史』を指すが、道真の言う「菜羹之宴」の出典は発見されていない。ただし道真は、菜を摘み羹を作る女性の世間的イメージについて詩の中で言及しており、民間ではこの頃既に、若菜摘みや菜羹を食す風習がある程度根付いていたものとみられる。

子日と縁の深い若菜について、正月上子日に内蔵寮・内膳司から若菜を供す「供若菜」が知られているが、一条兼良の『公事根源』は「寛平年中より始れる事にや」と推測している。「内宴」でも若菜が供される場合があり、『西宮記』によれば、内宴の日が子日に当たると、女藏人が若菜の羹を土器に盛って王卿に供する。『河海抄』所引の『蔵人式』『清涼記』には、正月二十一日から二十三日の間に子日があれば、その日に内宴を催したとある。子日宴が初子の日に限らなくなった背景には、二十日前後の開催を目

指した事情もあろうか。

ここまでの例をみると、宮廷行事としての子日は、屋内で宴を催するのが普通である。しかし宇多朝の寛平八年（八九六）、屋外開催の子日宴とみられる例が初めて出現する。これが閏正月六日戌子の北野行幸である。以下、『日本紀略』『扶桑略記』同日条を引用する。

・『日本紀略』寛平八年（八九六）閏正月六日条

天皇為_二遊覧_一。幸_二北野_一。午刻先御各流幸_二雲林院_一。皇太子以下王卿陪云々。以_二院主大法師由性_一為_二權律師_一。未時。事幸_二船岡_一。放_二鷹犬_一追_二鳥獸_一。

・『扶桑略記』同日条

有_二子日宴_一。行_二幸北野雲林院_一。其扈從者。皇太子及一品式部卿本康親王。上野太守四品貞純親王。四品貞數親王。大納言正三位源朝臣能有。中納言從三位藤原時平。中納言源光。中納言菅原道真。參議從三位藤原高藤。從三位藤原有実。參議源直。參議正四位下源貞恒。參議源希。殿上六位以上皆着_二麴塵衣_一。雲林院之院主由性法師任_二權律師_一（遍昭僧正在俗時子）。弘延。素性兩法師施_二度者各二人_一。

当日、宇多天皇はまず雲林院に向かい、院主由性を權律師に任じ、弘延・素性に度者を賜った。谷口孝介氏は、船

岡山へ赴く途中に雲林院に短時間立ち寄り、仏事を行っただけで、主目的は子日の野遊だったと推測している。¹²⁾『日本紀略』はその後の船岡での狩獵を記すが、子日遊とは明言していない。狩獵記事がない『扶桑略記』は「子日宴」と明記する。

当日の供人の顔触れを考える。東宮敦仁（醍醐）・式部卿本康は親王の上席であるから扈從は当然としても、他の親王は清和皇子の四品親王貞純・貞数以外に見えない。敦仁以外の宇多皇子は幼少で参加できなかったと推察できるが、清和皇子や光孝皇子で当時四品以上の親王は他にも存在するため、親王の参加者の少なさが気になるところである。貞数は昌泰元年（八九八）の宮滝御幸や延喜元年（九〇二）仁和寺法華八講、延喜十三年（九一三）亭子院歌合に参列しており、宇多と親しかったと考えられる。¹³⁾貞純と宇多の關係を示す史料は管見に入らなかった。一方、公卿は、寛平八年閏正月時点での公卿十四人中、九人が参加している。不参加の五人のうち、参議源湛・昇兄弟は父源融の服喪中、権中納言藤原国経は新羅賊追討のため任じられた大宰権帥の任期中で、扈從できる状況にない。右大臣藤原良世・参議藤原有徳が出席しなかった理由は不明だが、良世は当時七十五歳の老人で、遊覧の供人は務まらなかったのかもしれない。要は、やむを得ない事情のある者以外、臣下は原則全員が参加、親王は宇多に近い者の

みが参加している、ということになるだろう。

船岡山での宴の様子について、紀長谷雄が筆録した文章が『紀家集』巻十四断簡に所収されている。ただ、この記は水損による破損が著しく、内容を精読することは困難である。ここでは、宇多一行の船岡山到着後、若菜摘みが行われたらしき場面のみ引用する。¹⁴⁾

以^二未一刻^一、乘^レ輿幸^二船岡最高之頂^一。皇太子以下、騎馬相從。其儀如^レ初。嶋中果菜、遺猶^二積^一。令^三人留守、更俟^二後召^一。未四刻許、令^三内豎^一「^二菓菜^一。仍即奉獻。

北山氏は、当該箇所について、周辺の山野で予め採取した「菓菜」、つまり若菜を人に守らせておき、内豎の手で宇多に献上したと読み解く。¹⁵⁾同日の雲林院での一幕を述べた道真作「扈^レ從雲林院^一不^レ勝^二感歎^一聊叙^レ所^レ觀」詩（『本朝文粹』巻九）の詩序でも、「故老」から聞いた話として「上陽子日」の「野遊」が紹介されており、松樹に寄りかかり、菓菜を食べて長寿と無病息災を祈るとしているの¹⁶⁾で、この日採取した若菜を羹にして食すことが行われたとみてよいだろう。なお、谷口氏は、この「故老」に聞く体裁は班固「西都賦」に拠るもので、史官が確かな典拠のない事柄を記録する際の表現だと指摘している。

以上の史料より、次の四点を寛平八年北野行幸の特徴として挙げる事ができる。

- ① 開催日が子日に当たる
- ② 行き先が船岡山周辺
- ③ 鷹犬を同行させ、狩猟を行っている
- ④ 船岡山周辺で若菜摘みをしている

これは前節で検討した為平の子日遊の内容と一致する。ただし『扶桑略記』によれば、殿上六位以上が皆「麴塵衣」を着用したという。供人が直衣や狩衣を着用していた為平の子日遊と異なり、皆朝服の袍を着用し行幸時の正装をしているのである。この装束の違いは、天皇の正式の行幸と、元服前の一皇子の外出という、儀式の格の差に由来するものと考えられる。宇多の行幸にはほぼ全公卿が扈從した一方、為平の子日遊に扈從したのは中納言以下で、大臣・大納言は見られないなど、供人にもやや格差があるが、これも同じ理由からであろう。

しかしながら、屋外開催の子日宴は、宮廷行事としては定着しなかったものと考えられる。寛平年間以降、村上朝までに宮中で行われた子日の催しを見ると、

・『日本紀略』天慶六年（九四三）正月九日条
於「御前」有「子日之興」。

・『日本紀略』天慶七年（九四四）正月二十七日条
有「子日興」。

・『日本紀略』康保三年（九六七）二月五日条

令「守平親王及小童等」於「東庭」有「子日之戲」、其後召「侍臣於梅樹下」給「酒」、奏「絃歌」、

と、何れも室内の小規模な「興」「戲」にとどまっていた。^{①⑥}それだけに一層、父帝の行幸に同行させるのではなく、あえて為平一人に大勢の供人を付け、華々しく北野へと送り出した村上・安子の対応の異質さが浮き彫りになる。最後に挙げた守平の「子日之戲」の例に関して、そもそもこの頃の村上後宮は、弘徽殿での「菓下馬」という小馬の競馬や（『日本紀略』康保二年六月七日）、清涼殿での猿楽など（『日本紀略』同年八月二日）、子供向けと思しき催事が目立っている。前年に安子が崩御してようやく喪が明けた時期と重なっているので、官人向けの正式な宮廷儀礼というよりは、母を喪った幼い遺児達を楽しませようとしたものか。「子日之戲」の後、侍臣に梅樹の下で酒を賜っているが、内宴に言寄せて内裏の梅樹の周りで飲酒や和歌に興じる例はこれ以前にも散見されるので、特別な意味を見出す必要はないだろう。差し詰め、子供達が一頻り遊んだ後の大人の慰労会といったところか。

もともと宮廷外であれば、屋外での遊覧・野遊びを伴う子日宴は多少例が見られる。醍醐朝の延喜五年（九〇五）正月二十九日戊子の宇多院の大覚寺御幸では、「採_二野菜_一之遊」が命じられ、詩宴が催された（『日本紀略』）。また、花山朝の寛和元年（九八五）二月十三日戊子には円融院の紫野御幸があった。『小右記』同日条によれば、この日円融院は車で紫野に向かい、公卿たちは騎馬で従った。当日の参加者は、左右大臣、円融の東宮時代からの側近、外戚の九条流の人々を中心に大半の公卿の名が挙がる中、関白太政大臣藤原頼忠は見えない。供人の殿上人は皆狩衣で、四位・五位・六位の者までもが「綾羅」を着用していたという。これは為平の子日遊と同様、正式の天皇の行幸でないため、官人たちは略服による奉仕を聴されたのだろう。京路から野辺まで見物の車が続き、実資はその様子を「如_レ雲」と形容している。円融は野口で馬に乗り、野辺に宴席を設けて、和歌の興や蹴鞠を楽しんだ。『円融院御集』には小松引きの話題も見える。ただ、鷹犬による狩獵や若菜摘みは見えない。

円融の向かった紫野は船岡山の東北一帯に広がる禁野である。寛平八年北野行幸の經由地となった雲林院も紫野にあり、『今昔物語』巻二十八「円融院御子日參曾禰吉忠語第

三」によると、御幸当日、円融は雲林院の南の大門の前で車を降り馬に乗り換えた。これに対して、宇多や為平の子日遊の地「北野」は、大内裏の北方の野を広くさす称で、紫野付近や嵯峨野周辺を含む用例も散見されるという。¹⁷⁾両者とも船岡山で狩獵を行っているので、「北野」の中でも紫野近辺の一帯にいたのであろう。つまり円融の子日遊は、宇多・為平の子日遊とは同じ場所で開催されたと思われる。狩獵を行わなかったのも、奥の船岡山までは登らず、手前の紫野で宴を催したのである。田中智子氏は、左大臣源雅信が御幸翌日「あはれなり昔の跡を思ふには昨日の野辺にみゆきせましや」（『円融院御集』五二番）という歌を円融に贈っている点に着目し、「昔の跡」とは雅信の祖父宇多天皇の寛平八年行幸を想起させ、円融の紫野御幸が宇多の先例に連なるものであることを讀える表現と指摘する。¹⁸⁾

円融院の紫野御幸が寛平八年北野行幸を先蹤としている点は、筆者も異存がない。だが、同時に、前者と後者の最終目的地の違い（紫野／船岡山）、儀式の内容の違い（和歌・蹴鞠・小松引き／狩獵・若菜摘み）などの相違点を見逃してはならないように思う。為平の子日遊は、目的地・儀式内容も宇多の先例に重なる。また、本節で見てきた通り、天皇主催の子日宴で屋外開催のものは珍しく、為平の子日

遊が寛平八年行幸に続く二例目である。これらの事柄から考えて、為平の子日遊は宇多の北野行幸を強く意識し、意図的にその先例をなぞったと言えるのではないか。そして、この一連の儀式の中で、かつての宇多天皇さながらに大勢の殿上人・鷹飼・犬飼を率い、船岡山に赴いて狩猟を視察したのは、主催者の村上ではなく元服前の親王為平であった。他でもない村上と安子がするように仕立て上げたのである。

東宮憲平の病もあり、憲平の長期的な在位が困難であるとの見通しが立った応和四年（九六四）頃、おそらくは村上と安子の間で、為平の将来的な立場が内々に確定したのである。⁽¹⁹⁾それを朝廷全体に知らしめることを目的としたのが為平の子日遊なのである。お披露目の場にあえて郊外の北野を選んだのは、寛平八年北野行幸を先蹤とするこゝとで、為平が宇多皇統の正式な後継者であることを示したのである。

四、代明親王家との関わり

第一節で指摘した通り、応和四年子日遊を為平厚遇時代の象徴的な儀式として回想し、父母の鍾愛を語る点で『栄花物語』『大鏡』の態度は一致している。しかし、為平の

供人をめぐる叙述態度は明確に異なる。『栄花物語』は、当日扈從した君達として、代明親王男の源重光・延光・保光、師輔男の藤原兼通・兼家を挙げる。『大鏡』は供人の詳細に触れない。

第二節で確認したが、当日の様子を最も詳しく記す『村上天皇御記』（『大鏡裏書』所収）に名前がみえるのは、参議藤原伊尹、藏人所雑色の藤原為信、雉を捕獲した藤原助信、右衛門督藤原朝忠、為平の持ち帰った獲物の名を称した源重光である。特に伊尹は、この頃為平家別当を務めており、⁽²⁰⁾儀式において重要な役割を担っている。『日本紀略』や『佐忠私記』（『西宮記』所収）には、為平の外祖父師輔の弟に当たる中納言藤原師氏の名が挙がる。

このように、『栄花物語』が記す供人の顔触れは他史料と大きく異なっている。ただ、兼通・兼家に関しては、安子の同母兄弟なので、甥の為平の外出に同行するのは自然である。問題は代明親王の子息たちで、重光以外の二人が当日出席したことを示す史料は他にない。代明親王自体、『栄花物語』中ではほとんど言及がない親王で、村上女御の莊子女王や藤原義孝室の系譜を説明する際、高貴な血筋を書き立てるために名前が挙げられる程度である。息子たちに関する叙述も少ない。重光は莊子女王の兄と紹介さ

れ、藤原伊周を婿取ったことが記される。長徳の変後は「致仕の大納言」と称され、これも子女の系譜説明のために名前を出される程度である。重光の子女の中には長徳の変や寛弘六年の彰子呪詛事件に連坐して処罰された者もいるのだが、作中では一切触れられない。延光は「枇杷の大納言」と称され、北の方敦忠女の話題にのみ名前が出される。保光は「桃園の中納言」と称され、僅かに、前述の藤原義孝室が保光女であること、長徳元年の疫病で薨去したことが述べられる。

この通り、作中の代明親王家関連の叙述はあまりに少ないので、その子息たちを「同じき君達と聞ゆれど、延喜の御子中務宮の御子ぞかし」(①六六頁)と紹介するのは唐突の感がある。「同じき君達と聞ゆれど」は、「一口に同じように君達とは申し上げるが、臣下の君達ではなく、皇孫の君達もいたの意」⁽²⁾と解するのが普通だが、それだけでは皇孫の中でも代明親王男の存在を特に強調した理由が説明できない。よって本節では『栄花物語』の叙述意図を探るため、代明親王家と九条流が当時どのような関係であったか検討したい。最初に代明親王自身の経歴と後援勢力を分析した後、代明親王の子女の姻戚関係を考える。

まず、代明親王の経歴について簡単に述べる。代明親王

は醍醐天皇の第三皇子で、母親は更衣の藤原鮮子、外祖父の連永は醍醐の父光孝天皇の従兄弟に当たる。延喜十九年(九一九)に元服し、常陸太守、彈正尹、中務卿を歴任した。『吏部王記』承平二年(九三二)十二月二日条によると、父醍醐天皇は崩御の間際、左大臣藤原忠平・代明・重明の三人を召し、「三事」の遺勅を託した。遺言の「三事」には忠平を太政大臣に昇進させるという内容が含まれていたが、御代替わりから二年経っても約束が果たされないで、重明は代明に面会して相談している。第一皇子克明・第二皇子保明は既に故人であったため、年長である第三皇子代明・第四皇子重明が遺言の相手として選ばれたのであるが、それゆえ代明は兄弟の中で一定の影響力を持っていたと考えられる。親王官の中でも格式ある中務卿に任官したのは、代明が重んじられた証であろう。ただし、実質の源氏長者として扱われていたのは、母方がより格上の家柄の重明の方であった⁽³⁾。また、『古今著聞集』には、踏歌後宴の負態後の御遊で笙を吹いた逸話(巻六「管絃歌舞」)や右大臣仲平の大饗で賭け碁を行った逸話(巻十二「博奕」)が掲載されている。朱雀朝の承平七年(九三七)、四品中務卿で生涯を終えた。

代明親王自身の後援勢力として想定できるのは、第一

に、母方の藤原北家末茂流である。『醍醐天皇御記』延喜十二年（九二二）正月四日条（『西宮記裏書』所収）によれば、正月の童親王拝覲において、代明は拝舞時に一礼をし忘れ、代明家別当の藤原俊陰が罰酒を賜っている。俊陰は鮮子の従兄弟であり、外戚家の縁で代明親王に仕えていたと考えられる。第二に、醍醐の外叔父に当たる三条右大臣藤原定方である。代明は定方女を正室としており、おそらくは定方家の経済力に支えられて、醍醐皇子の中では比較的豊かであった。『大和物語』九十四段（新全集）には、妻を亡くした後もしばらくは定方邸に住み続け、亡妻の妹の九の君を娶ろうとしたが、当時侍従であった師尹が九の君に恋文を贈っているとの噂を聞いて不快になり、定方邸を出て自邸に戻った、という逸話が収録されている。代明の死後の『吏部王記』天慶三年（九四〇）八月二十六日条によれば、遺児恵子女王の裳着および延光の元服の日、代明の同母妹婉子内親王の意向で叔父の重明と式明の二人だけが客として参列した。延光の理髪は母方の伯父藤原朝忠が務めていたというが、つまり朝忠は客に数えられていないことになる。朝忠が代明親王家の家司であった可能性もあるだろうが、代明・定方女夫妻の死後、その遺児たちが定方家から援助を受け続けていた証左といえよう。

次に、代明の子供たちの姻戚関係を検討する。まずは三人の娘から、莊子女王は、天曆四年（九五〇）村上天皇に入内し、具平親王と楽子内親王を産んだ。父母の死後の入内となるが、母方の定方家が後援していたか。恵子女王は、師輔の嫡男藤原伊尹と結婚し、冷泉女御懷子をはじめ多くの子女を産み、花山天皇の外祖母となった。子息の中でも義孝は母方の従姉妹に当たる保光女と結婚、行成を産ませた。代明、保光と二代続けて姻戚関係を結んでいるからには、代明親王家と伊尹家の関係は深いものと考えねばならない。義孝は行成が三歳の年に急死するが、外祖父保光が行成を養育し、自邸の桃園邸で元服させた。行成は具平親王宅の六条宮を度々訪れ、大叔母莊子女王の用事をこなすこともあった。厳子女王は、実頼の継嗣藤原頼忠の妻となり、嫡子公任や円融女御の遵子、花山女御の禊子を産んだ。先述の保光は実頼孫の懷平も婿取っており、こちらも二代続けて実頼家と姻戚関係を結んでいる。

重複もあるが、代明の三人の子息の姻戚関係を続けて見ていこう。源重光は行明親王女を妻とし、娘を藤原伊周に嫁がせ、致仕によって伊周に大納言の座を譲った。先述の通り、重光一門は中関白家との結びつきが強く、子息たちは長徳の変に連坐して不遇な生涯を送った。九条流の有望

株を婿取ったものの、婿と共倒れした形である。源延光は、時平の孫敦忠女を妻とし、娘を師尹男の済時と結婚させた。済時と延光女の間には三条皇后の城子が生まれている。源保光は、妻の詳細は不明だが、娘二人を義孝と懷平に嫁がせている。摂関家でも有力な九条流・小野宮流両派閥と姻戚関係を結んでいる点が実に戦略的である。

以上、ここまでの要点を今一度整理する。代明親王は末茂流と醍醐天皇の外戚定方家（高藤流）を後見勢力とする。代明自身は早く亡くなったが、娘たちは天皇家・九条流・小野宮流と、何れ劣らぬ名門の嫡流に嫁いだ。代明の子息たちも、重光は九条流の中関白家と、延光は小一条流と、保光は九条流・小野宮流と、摂関家の中でも有力な家筋と満遍なく姻戚関係を構築した。彼らの子孫はそれぞれ各家の嫡嗣や后がねとなっている。

為平子日遊の応和四年（九六四）頃には、莊子は村上に入内し、恵子は伊尹と結婚していた計算になる。厳子女王と頼忠の結婚時期は不明だが、二年後の康保三年（九六六）に嫡子公任を出産しているので、既に結婚していた可能性は高い。つまり代明親王男たちは子日遊時点で、官位的には長輩ながら、帝の覚えめでたい九条流とも、また最高権力者の左大臣実頼とも、姉妹を通じて姻戚となっていたの

である。父代明は早世しているので、このような巧みな婚姻政策を主導したのは息子である彼ら三人、重光・延光・保光なのであろう。

代明親王家のあり方は、九条流の中でも師輔とのみ姻戚関係を結んでいた源高明とは正反対である。師輔は生涯で三人もの皇女と通じたが、その内の勤子内親王・雅子内親王は高明の同母姉妹であった。高明自身も当初は実頼女を妻に迎えていたが、その逝去後は師輔の三女、師輔と姉雅子の間に生まれた愛宮と、師輔の娘二人と次々結婚している。山中氏によれば、為平親王妃となった高明女も師輔三女所生の娘だという²⁴。そのため、師輔とその娘安子が亡くなると、高明と為平は途端に孤立することとなったのである。

『栄花物語』の本文に立ち返ると、子日遊の記事の少し前には、伊尹女の懷子が冷泉帝の第一皇子師貞親王を出産した記事が置かれており、「御氣色いみじうめでたし」（①六四頁）と喜色を浮かべる伊尹が描写されている。本節冒頭で指摘したように、為平の外伯父で為平家別当を務めた経歴もあり、伊尹は本来為平の後援勢力となるべき人物であった。しかし、待望の孫皇子誕生で最高権力者への階段を昇り始めた伊尹にとって、自身と姻戚関係を結んでいな

い為平の存在意義は完全に無くなった。陰謀の有無に関係なく、師貞誕生が為平から帝位をさらに遠ざけたことは明らかである。そういった意味でも、為平が「帝がね」であった日の回想から、かつての最側近伊尹の存在が消えているのは意味深といえる。

『栄花物語』が、子日遊の日に代明親王男たちが為平に扈從したことを殊更に強調するような書き方をするのは、婚姻政策によつて結果的に為平の孤立を招いた高明と比較し、同じ醍醐天皇の血筋でも宮中で顔が広く、九条流・小野宮流と良好な関係を保つる代明親王家を引き合いに出して、高明を暗に批判する意図があつたのではないか。子日遊記事末尾の「源氏の大臣の御婚になりたまひしに、事違ふと見えしものをや」という世人のささめきは、高明家でなく代明親王家に婿入りしておけば、このような悲惨な末路は免れたかもしれないのに、の意が込められているのかもしれない。また、伊尹が安和の変に関わつていと読者に解釈されることを避け、あえて名前を隠匿したのだとすれば、妻の兄弟である代明親王男たちの名を代わりに列挙することで、伊尹の存在を匂わせた可能性もあるだろう。

おわりに

以上、『栄花物語』の為平親王子日遊記事を検討した。歴史物語が為平の幸福な昔の象徴として子日遊を回想するのは、それが過去の宇多天皇の行幸を意図的に模し、為平を事実上の「帝がね」として官人たちにお披露目する場だったからである。『栄花物語』『大鏡』共に儀式描写が過剰に華やかなのは、為平立坊に向けた両親の期待を示唆するためであろう。

その一方で『栄花物語』は、代明親王家の三兄弟が当日為平に扈從したという、他史料には見られない内容を叙述した。安和の変の陰謀には触れず、あくまでも九条流に寄り添う筆録者の視点から見ると、為平が孤立し立坊が実現しなかった要因は、姻戚が極めて偏っている高明の婿になつたことであつた。『栄花物語』は、為平が高明女と結婚する前、要するに安子の兄弟たちや代明親王家の人々とまだ親交があり、宮中に味方が多くいた頃の様子を、同情の念を込めて追懐しているのである。

【注】

(1) 『栄花物語』中で、狩衣が年若い貴族の装束として用いられている例を以下に挙げる。

・みはてぬゆめ巻、詮子長谷寺参詣

御供には、上達部、殿上人、年若くいみじき、狩衣姿をしたり。大人殿ばらは、直衣にて仕うまつりたまふ。(①)

一九六頁)

・うたがひ巻、道長の受戒

御出家の年の十月に、奈良にて御受戒あり。おはしますほどに、よろづを削がせたまふと思せど、上達部、殿ばら、あるは位浅き上達部、君達は、馬にて仕うまつりたまふ。あるは直衣、あるは狩衣にておはす。殿上の君達さまさまの襖ども、指貫、心のかぎりしたり。(②) 一八六頁)

(2) 富岡本の本文は、松村博司『栄花物語の研究 校異篇上巻』(風間書房、一九八五)の翻刻に拠る。

(3) 学習院本の本文は、国文学研究資料館の紙焼写真を参照し、独自に翻刻した。

(4) 筆者が二〇二二年の中古文学会秋季大会(十月十六日開催)にて行った口頭発表「『栄花物語』における為平親王の造型——『式部卿宮』の呼称を中心に」の内容に基づく。

(5) 藤本一恵『私家集全釈叢書8 清原元輔集全釈』(風間書房、一九八九)により、詞書の「式部卿親王」を為平と解釈する。

(6) 子日の先行研究は多い。主要な参考文献のうち、今回参照したが注に取り上げなかったものを以下に挙げる。山中裕「外来文化と年中行事」(『平安時代の古記録と貴族文化』思文閣出版、一九八八)・福田智子「二月の子の日考——『能宣集』諸本の詞書をめぐって」(『語文研究』一九九〇年十二月)・田島智子「後撰集時代・拾遺集時代の特色——子日をもぐって」(『屏風歌の研究 論考篇』和泉書院、二〇〇七)・蒲狡艶「古今集時代における「松を引く」表現の出現——子日行事との関わりを中心に」(『語文』二〇一九)・滝川幸司「内宴の起源——「弘仁の遺美」か「太宗の旧風」か」(『女子大国文』二〇一六年一月)・具恵珠「内宴と漢文学——詩序を中心に」(『国語国文』二〇二二年一月)など。

(7) 井上薫「子日親耕親蚕儀式と藤原仲麻呂」(『檀原考古学研究所論集』一九八八年十月)

(8) 倉林正次「子日の遊び」(『饗宴の研究(文学編)』桜楓社、一九六九)

(9) 大演眞幸「大伴家持の年中行事詠——初子・青馬節会歌を中心に」(『國文學』一九九五年十二月)

- (10) この年の正月十一日は辛多である。谷口孝介「宇多天皇の風雅―雲林院子日行幸をめぐって」(『菅原道真の詩と学問』塙書房、二〇〇六)は、正月二十四日甲子に行われた宴を『日本紀略』が錯誤により十一日としたものと推測している。
- (11) 『西宮記』正月下、『北山抄』正月
- (12) 前掲(10) 谷口論文
- (13) 小林あづみ「亭子院歌合の人物構成について」(『名古屋文理短期大学紀要』二〇〇一年三月)
- (14) 三木雅博『紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引』(和泉書院、一九九二年)に拠る。
- (15) 北山円正「子の日の行事の変遷」(『平安朝の歳時と文学』和泉書院、二〇一八年、初出『神女大國文』二〇〇六年三月)
- (16) 『河海抄』所収の『醍醐天皇御記』延長二年(九二四)正月二十三日条には、宇多院から醍醐に若菜が調進され、子日宴が行われたことが記されているが、この宴の趣旨は宇多院主催の醍醐天皇四十賀であるため、宮中の子日宴の開催例としては考慮に入れない。
- (17) 『角川古語大辞典』「北野」項、『角川日本地名大辞典』「北野」〔紫野〕項による。
- (18) 田中智子「円融院子の日の御遊と和歌―御遊翌日の詠歌を中心に」(『東京大学国文学論集』二〇一六年三月)
- (19) 子日遊の約一ヶ月前、応和四年(九六四)正月二日の童親王拝観の際、為平親王は村上天皇の勅で帯剣を聴されている(『日本紀略』同日条)。童親王の勅授帯剣は珍しく、史料上で確認できる範囲では承平四年(九三四)の成明親王(親王時代の村上)以来(『西宮記』卷十七「臨時五」)。村上的子の中でも初の勅授帯剣であり、立坊の布石だった可能性がある。安田政彦「勅授帯剣について」(亀田隆之先生還暦記念会編『律令制社会の成立と展開』吉川弘文館、一九八九)は、外祖父師輔との関係も勅授の要因ではないかと指摘している。
- (20) 『西宮記』「五月 親射事付競馬」
康保二年六月七日、於弘徽殿、有競馬事、細殿座南第四間大床子、以爲平、守平両親王、爲左右頭、公卿等依召候細殿南二間、次皇太子候細殿南五間(「以簀爲坐」、次伊尹奏左奏着座、次兼家奏右奏(依各親王別當也)、…
- (21) 松村博司『栄花物語全注釈1(日本古典評釈・全注釈叢書)』(角川書店、一九六九)
- (22) 安田政彦『醍醐皇子女』(『平安時代皇親の研究』吉川弘文館、一九九八年、初出「醍醐皇子女に関する二・三の考察

—『吏部王記』承平元年九月廿九日条をめぐって』『続日本紀研究』一九九一年十月

- (23) 『吏部王記』承平四年(九三四)十二月二十七日条によれば、外戚に恵まれず困窮していた弟源允明に対して、元服のため自邸を提供するなど、重明と共に援助を行っている。

- (24) 山中裕「源高明と師輔」(『平安時代の古記録と貴族文化』思文閣出版、一九八八)

* 『栄花物語』『大鏡』『万葉集』『伊勢物語』の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠る。和歌の引用について、『古今和歌六帖』『円融院御集』『順集』『道綱母集』は『新編国歌大観』、『元輔集』は『群書類従』に拠り、適宜私に表記を改めた。歴史資料の引用について、『日本紀略』『扶桑略記』『類聚国史』は国史大系、『禁秘抄』『雁衣鈔』『大鏡裏書』は群書類従、『西宮記』は故実叢書に拠った。何れの資料も適宜私に表記を改め、旧字や異体字は通行のものに改めている。

* 本稿は古代文学研究会(二〇二三年七月三十日開催)における口頭発表に基づく。ご発表の席上、ご教示頂いた先生方に御礼を申し上げる。

